森林はみんなのもの。
これを世界の資源公正と山村の生業（なりわい）に繋げるには。

生物資源科学部　教授　伊藤勝久

わが国は世界的に見ても森林国といえます。何度かの森林資源の危機を乗り越えて、現在は育成段階に入り、森林資源量は急速に増加しています。この森林をいかにして持続可能に無駄なく使い、地域と世界の環境保全役立て、また林業が安定的に営め、その所得をもとに人々が山村に安心して住めるようにするかが課題です。

森林の危機は、伐採や開墾など過剰な利用によるものと、資源を使わず放置することによるものがあります。わが国が直面しているのは、森林の使わなさ過ぎによる問題です。そのため樹木とタケや蔓が鬱蒼と茂り、森の中は真っ暗で下草も生えず、樹木の成長も抑えられ大雨や台風、大雪などに弱く、保水力も小さく、土砂崩れが起こりやすくなります。

この原因は国内の森林資源が高く売れないこと、つまり森林所有者にとって森林は手入れをして保有する価値のないものとなってしまっていることです。またもう一つの原因は加工・利用者にとって外国産材の方が（安くも高品質でもないが）大量・均質で使いやすいことです。

そのため国内資源があるにも関わらず木材が輸入され、その裏では輸入国の森林がもっていた保水機能や生物多様性を喪失させていることになり、さらに輸入分は国内資源を伐採せずに保全したことになるため、いわば環境価値を無償で国際移転したことになります。

このような資源的不均衡が木材輸入により発生しています。国内の資源を無駄なく適正な価格付けで利用することで、山村の森林所有者や林業を活性化し、世界の資源公正を実現することが出来ます。

木材を伐採、加工利用して林業は循環し、森林状態も良好になります。

ある所有者が200年かけて作った森林。世代を超えた営みが必要です。